

藤堂明保編

学研
漢和大字典



学研 漢和大字典



藤堂明保 編



学習研究社

学研漢和大事典 定価 4300円

昭和53年4月1日 初版発行

昭和56年2月1日 第10刷発行

編 者 藤 堂 明 保

発 行 人 渡 部 ひ ろ し

編集責任者 大 山 治 義

印 刷 所 図 書 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 株 式 会 社 若 林 製 本 工 場

~~~~~

発 行 所    株 式 会 社    学 習 研 究 社

(〒145) 東京都大田区上池台4-40-5

振替・東京8-14293〆番

---

© OAKEN 1978      本書内容の無断複写を禁じます。

☆この本の内容に関するお問い合わせ、製本上のミスなどがあつたら、下記までお願いします。

文書は、東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)

学研お客さま相談センター「学研漢和大事典」係

電話 東京(03)720-1111(大代表)

0581-241-205-1002

## 編者のことば

この字典の執筆にとりかかってから、なんと十六年もの歳月が過ぎ去った。その間、執筆・校正の日々であった。今までの中国の辞典と日本の漢和辞典を見渡してみても、たとえば「服」という字が、なぜ、(一)服従の服と、(二)衣服の服という意味に使われるのかの疑問を解説したものがない。「服」とは、「びったりとくつつく」という意味だからこそ、びったり体につける服を衣服と呼ぶのである。また、布帛の布とは「平らに敷きのばすもの」という意味だからこそ、公布という場合には、しきのばすことを意味する。また、しきのばす動作を敷ともいい、ひろくしきのばすことを、普及の普という字が表すのである。この場合には、布―敷―普は、明らかに同系の「言葉の仲間」だといってよい。

だが、こういうとらえ方をするためには、何よりもまず、漢語の音韻論を武器として、周・秦・漢のころの「上古漢語」において、どれとどれの言葉が同じ発音（または、きわめて近い発音）であったかをたしかめなければならぬ。日本流になまった呉音読みや漢音読みで「同音」だからといって、上古の漢語でもそうであったとはかぎらない。また、甲骨文字や金文という古い字形の暗示するすべから、原初的な文字の表そうとした意味をくみとる心がけも欠かせない。それだけの用意もなしに、たんなる古典学者や漢文の先生が字典を書くのは、「木に縁って魚を求む」たぐいと言わざるをえない。

この字典では、音韻論によって復原できる発音の姿を「上古（周・秦・漢）―中古（隋・唐）―中世（宋・元・明）―現代（北京式ローマ字綴りもそえた）」の四段式に分けて、おもな親字につけた。さして重要でない字については、右のかわりに「某と同音」と記したが、これは、中古漢語をあらわす「広韻」や「韻鏡」において同音だという意味であり、上古において同音だとはかぎらない。

また、各字ごとに欄外の項を設けて、原初的な字の成り立ちと、その表そうとした意味を解説した。さらに、同系の「言葉の仲間」を付記することによって、中心となる意味の理解を助けるようにした。また、紛らわしい類義語があるときには、相互の違いにも触れた。

ALT 67/04

最も苦心したのは、①②③……と続く「意味」の解説である。先の例に示したように、動詞や形容詞・名詞など、さまざまな用法があるさい、その間には意味のつながりがあるはずである。それを見落としては字典としての値うちがないし、利用するがわでも、まとまった印象をくみとれない。この字典では、最も原初的な用法を①に紹介して、以下つぎつぎに派生義を説くのを原則とした。しかし、常用される用法を先にして、利用者の便宜をはかった場合もある。また、日本の古訓の中には、その漢字の意味を理解するのに正しい方法を教えてくれるものもあるので、資料としてあげた。

字典づくりは、職人の仕事である。ひと刻みずつ彫りこむ職人のように、私も一字ずつの解説に念を入れてはきたが、なにしろ字が多い。見落としや、前後のくい違いが見つかるたびに、朱筆を加え、削ってはまた書きたし、書きたしては、くい違いを直した。そのたびに、編集部と、図書印刷の皆さんにご迷惑をかけた。我慢に我慢をかさねて、よくも今日までもちこたえてくださったものだ」と感謝にたえない次第である。

専門語の校閲と、付録の「中国の名著」「中国の詩」「中国文化史年表」については、学界中堅の俊秀を動員した。「中国の文字」とことば」は、私みずから執筆した。また、本文中の資料図と「中国歴史地図」については、中国考古学・史学畑の大家の手を煩わせた。今までに例をみないりっぱなものである。ここにつつしんでお礼を申し上げる。

最後に、今一度、学習研究社社長古岡秀人氏には、終始変わらぬ御厚情をいただいた。ここに、衷心より厚くお礼を申し上げる。さらに、学習研究社専務取締役渡部ひろし氏、辞典編集部長大山治義氏、編集長川口久彦氏、亀岡紀子氏、また、図書印刷株式会社森繁俊・秋山明生・図師毅・渡辺英一・川端良一の諸氏の御尽力に対し厚くお礼申し上げる次第である。

昭和五十二年七月

藤 堂 明 保

凡 例

■ 親字について

(一) 収録範囲

この字典には、左の基準によって、約一万一〇〇〇字の親字を収録した。

- (イ) 当用漢字一八五〇字、人名用漢字九二字、追加人名用漢字二八字、当用漢字補正資料によって当用漢字表に加えられる漢字二八字、新漢字表試案(昭和五十二年国語審議会報告資料)にみえる漢字。
- (ロ) 現代新聞の漢字(国立国語研究所報告資料)にみえる漢字。
- (ハ) 日本と中国のおもな古典の読解に必要なと思われる漢字。
- (ニ) 漢字の意味を系統的に理解するために必要な漢字。
- (ホ) 使用度の高い国字。

(二) 配列方法

(イ)「康熙字典」に準じた部首の順による。ただし、その漢字の成り立ちから判断して、他の部首のところに移動させた場合もある。

(ロ) 同一の部首の中では、部首を除いた部分の画数の順。同一画数の中では、一般的な漢字の五十音の順。訓のみの国字は、その訓の五十音の順。

(ハ) 当用漢字と人名用漢字は、それぞれ「当用漢字字体表」(昭和二十四年内閣告示)「人名用漢字別表」(昭和二十六年内閣告示)で示された字体の部首・画数のところに配列した。ただし、発表された字体が、従来の部首を含まなくなつたものは、便宜上、新しく設けた部首のところに配列した。

(三) 親字の見出しは、左のように示した。

〈例〉

乗 (9) 教 乗 (10)

a — b — c — d — e —

f — g — h — i — j — k —

人 10 遙 (12) 人 10 遙 (12) 人 10 遙 (12)

1 — 2 — 3 — 4 — 5 — 6 — 7 — 8 — 9 — 10 — 11 — 12 —

a 部首と、部首を除いた画数  
b 「当用漢字字体表」などに示されている漢字  
c 総画数  
d 当用漢字・教育漢字(当用漢字別表の漢字・人名用漢字などの区別  
e 「当用漢字字体表」に示される以前の旧字体  
f 現代かなづかいによる音  
g 歴史的かなづかいによる音

(四) 字 体

(イ) 当用漢字・人名用漢字・追加人名用漢字・当用漢字補正資料にみえる漢字は、それぞれ、「当用漢字字体表」「人名用漢字別表」「追加人名用漢字表」(昭和五十二年内閣告示)「当用漢字補正資料」(昭和二十九年国語審議会審議報告)によつた。

(ロ) (イ)に含まれない漢字、および「当用漢字字体表」などによって示される以前の旧字体については、比較的広く通用している字体を採録した。

(ハ) 旧字体は、親字の下に示した。ただし、単に活字の形だけの相違で、字体の本質とは関係がないと思われるものは、とくに旧字体とはしなかった。

(ニ) 通用している旧字体に二種類以上ある場合は、とくに広く通用しているものまたは、その漢字の成り立ちから判断して原形に近いものを採用し、他を異体字とし(附)の下に示した。

(ホ) いくつもの漢字に含まれる共通の要素は、なるべく統一した。

〈例〉 自(即・卿など) 係(綿・潘など)

(イ)「当用漢字字体表」などによって示された新字体が、二つ以上の旧字体の音と意味をもっている場合は、■で区別した。

予 (4) 教 予 (16) 豫 (16)

(五) 音・調・読み

(イ) 字音は、呉音・漢音・唐宋音・慣用音の区別をして、まず現代かなづかいでそれを示し、歴史的な字音がなを(一)の中に示した。そのさい、国語資料に見の音であつても「広韻」と「韻鏡」によって同音字から、呉音・漢音を推定して示した。

(ロ)「当用漢字音調表」(昭和四十八年内閣告示)に示された音と調は、の下に音はカタカナ、調はひらがなの太字で示した。

(ハ) 音の相違が意味におよぶ場合は、田田によって区別し、音と意味とを対応させた。

(ニ) 意味の理解をたすけるために、一般に定着している訓・漢文訓読のさい、しばしば使用される訓・日本の古訓資料の中で、すでに日本語の読みとして定

着した訓などを選び、各品詞の下に太字で示した。その場合、文語形が現代語と相違するもの、また、現代かなづかいと相違するものは、その文語形を歴史的かなづかいで（一）の中に示した。

(中) その漢字が漢文訓読のさい、サ変動詞・形容動詞、および副詞の形で用いられるものは、その形を品詞の上に示した。

(例) ①(形) 人あたりがよくて、口先がうまいさま。

②(動) 口先うまくとり入る。おもねる。

#### (六) 四声・韻

親字の下または左に、その漢字の四声と韻を示した。ただし、金・元代の「詩韻」は通俗書であり、言語資料としては役に立たない。そこで各字については「詩韻」の韻を示し、ついで（一）の中に「広韻」の韻の名を示した。両者が同じ韻であるときは、この手続きを省略した。

#### (七) 中国語音

(イ) おもな親字の下または左に、上古・中古・中世・現代までの音の変遷をローマ字で示した。ただし、中世(十四世紀)に成立した「中原音韻」は収録字が少ないので、同音の字から推定した音を示した場合がある。現代の北京語の音については、「漢音拼音方案」による「ローマ字綴り」を（一）の中につけ加えた。現代音が、上古・中古音から、著しく不規則な変化をしたものについては、「……」の形によって、つながりが不明なことを示した。

(ロ) さして基本的ではない漢字については、「……」と同音のようにして「広韻」にみえる同音字をあげ、ローマ字による音の変遷を省略した。ただし、そのさい、上古音は必ずしも同じではない。

(ハ) 同じ字について「広韻」にいくつもの発音が示されているときは、意味の違いがある場合は列挙し、そうでないときは、一部省略した。また、現代音は、「新華字典」と「中日大辞典」愛知大学版に収録されているものを重点的に示した。

#### (八) 意味の記述と品詞

(イ) 国語の下に、親字の意味を①②③……の順に解説した。そのさい、その漢字の成り立ちにもとづく原義を第一として、順次、派生義に及ぶように配慮した。

(ロ) 同音による借用義は、▽の下に「……」に当てて「用法」として説明した。

(ハ) 常に二字以上の熟語の形で用いられるものや、外国語をあらわす仮借の用法(当て字)などは、左のような形で説明した。

(例) ①「勿勿」はあわただしく、心をなやませる。

(ニ) 親字の意味を用法上から品詞に分類して示した。そのさいの品詞の分類は、漢語の文法で一般に使われるものによった。略語・記号一覽

(ホ) 漢字本来の意味と異なった日本語特有の意味・用法がある場合は〔国〕の記

号のあとに、①②③……の順にその意味を説明した。そのさい、品詞名は省略した。また、起源的に同じ仲間だと思われるものは、①②③の中を、①②③……に細分した。

(ハ) 〔国〕の場合、その漢字が一字で単独に読まれるものは、その読みを太字のひらがなで示した。

(例) ①(動) もよほす(か) 用意を調えて行事を行う。  
また、宴を行う。「開催」

(ロ) その漢字の意味に、同義・反義・類義の漢字がある場合は、●●●●の記号の下に、それらの漢字を示した。

#### (九) 用例

親字の意味の理解をたすけるために、中国古典および、日本漢文の中から用例を採録した。その場合、原文に歴史的かなづかいで読み下し文をつけた。成り立ち

#### (十) (イ) すべての親字に、その漢字の成り立ちを簡明の記号の下に解説した。また、基本的な漢字には、甲骨文・金文(金石の字)・古文・籀文・篆文(小篆)・楷書に至る字形の変遷図をつけた。そのさい、その漢字の成り立ちの理解をたすけるために、他の漢字の偏旁で金文・古文として示したものもある。

(ロ) 漢字の成り立ちおよび、意味の理解をさらに深めるために、単語家族に分類した同系の漢字の解説を補足した。

(ハ) 日本語の訓が同じで、意味に違いがある漢字(同訓異義字)については、成り立ちの解説のあとに、その違いを解説した。

#### (十一) 古訓

(イ) 「新撰字鏡」・「倭名類聚抄」・「類聚名義抄」(観智院本・図書寮本)から、その漢字の訓を採録して、国語の記号の下にカタカナで示した。ただし、観智院本については、漢字の部分はそのままにした。また、異体字として(国語)の記号の下に示した漢字および、筆写によって字形が異なるものの訓も採録した。

(ロ) 採録にあたってはなるべく本文に従った。それぞれの索引を参照して、疑問のあるものも、\*印をつけて採録した。

(ハ) 「倭名類聚抄」で、四等官に該当するものは、長官・次官・判官のみを、また、地名は旧国名のみを採録した。図書寮本は、その索引のみを使用し、観智院本は「……」のように表記されているものは、「アタル・(アツ)」の形で示した。

(ニ) 親字の意味説明が「AB」とはの形になっているものは、「A」の親字のところにだけ示した。

(ホ) 配列は、資料の成立年代の古い順にした。ただし、同一資料の中は、五十音順にした。も出典名一覽

## (三) 名のり

当用漢字・人名用漢字には、**[名]**の記号の下に、その漢字が人名として一般に用いられる訓読みを、五十音順に示した。

## (五) 親字が下につく熟語

**V**の記号の下に、その親字が下になって構成される二字の熟語を画数順に示した。

## (六) 検索

(1) 旧字体および、異体字は、その所属する部首・画数の末尾に、検索のための見出しをたてた。

(2) 部首の判別しにくい漢字については、その漢字の部首を除いた画数の末尾に検索のための便宜上の見出しをたてて検出できるように配慮した。

## 熟語について

## (一) 収録範囲

熟語は、左の基準によって、約七万語を収録した。

(1) 中国のおもな古典にみえる語句・故事成語・おもな人名と地名。

(2) 中国のおもな古典の書名および、漢文で表記されている日本の書名。

(3) 日本のおもな古典にみえる語句および、現代生活に必要と思われる難読の語。

(4) 仏典にみえるおもな仏教語。

## (二) 配列方法

(1) 熟語の二字目の画数の順による。二字目が同画の場合は、その漢字の読みの五十音順。

(2) 一点読みをする熟語は、熟語の末尾。

## (三) 見出しの体裁

熟語の見出しは、左のように示した。

## 《例》

〔傍観〕**観** (カハツカン)

a —  
b —  
c —

d —

〔了〕**承** (リョウショウ)

e —

a 旧字体  
b 現代かなづかいによる読み  
c 歴史的かなづかいによる読み  
d 「当用漢字表」にない漢字を示す記号  
e 同音の漢字による書きかえ字

(1) 二字目以下の漢字が「当用漢字字体表」の漢字と著しく異なる場合は、その漢字を(—)の中に示した。

(2) 「当用漢字表」にない漢字には、その漢字の右上に・のしるしをつけた。また「当用漢字補正資料」により、「当用漢字表」に加えられる漢字には、その漢字の右上に・のしるしをつけた。

(3) 国語審議会報告資料の「同音の漢字による書きかえ」に該当する熟語は、書きかえる漢字を(—)の中に示した。

## (四) 読み

(1) 熟語の読みは、現代かなづかいによって、音読みはカタカナ、訓読みはひらがなで、語構成にしたがって二行にわけて示した。そのさい、現代の字音がなづかいが歴史的な字音かなづかいと異なるものは、その歴史的かなづかいを(—)の中に示した。ただし、従来のものに異説があっても、まだ定着していないときには、便宜上、従来のままの歴史的かなづかいを示したので、親字の場合と異なる場合もある。また、梵語や外国語からの音訳語、当て字による日本語の読みなどは、語構成を無視して一行で示した。

(2) 熟語の読みが二つ以上ある場合は、一般的な読みを先に示した。

(3) 音読みと、返り点読みが二つある場合は、音読みを先に示した。

(4) 読みが違ひによって意味が異なる場合は、**[日]**…の記号で区別した。

(5) 意味の記述は、その熟語の原義に近い順に①②…とした。

(6) 日本語特有の意味がある場合は、**[国]**の記号の下に、その意味を説明した。

(7) その熟語が、仏教語・俗語である場合は「**[仏]**」(俗)の記号で示した。「**[俗]**」には、宋・元・明の俗語から現代中国語まで含まれる。読みは音読みとしたが、とくに現代俗語については、北京語の読み方をカタカナで示した。

(8) その熟語に、同音同義・異音同義、および、反対の意味の熟語がある場合、また、偏が異なるのみで、同音同義の熟語がある場合は、それぞれ、**[同]**・**[異]**・**[偏]**の記号をつけて、その熟語を示した。

(9) 熟語で、下にくる漢字の意味の理解をたすける必要がある場合には、▽の下に、その漢字の意味を簡単に説明した。

(10) 熟語の意味の理解をたすけるために、中国の主要古典および、日本漢文の中から採録した用例を示した。その際、その熟語の典故を示すために、たんに出典名のみを示したこともある。

(11) その熟語の典故である用例が熟語の見出しの形と同一でないものは、▽の下にそのことを説明した。

(12) 古訓

意味とは関係なく、日本の古訓資料にみえる訓を、**[古]**の記号の下に示した。その体裁は親字の場合と同じ。

(七)

意味とは関係なく、日本の古訓資料にみえる訓を、**[古]**の記号の下に示した。その体裁は親字の場合と同じ。

(八) 検索

(イ) 首読みと返り点読みとの二つの読み方がある熟語のうち、重要と思われるものについては、返り点読みをする見出しを、検索のために熟語の末尾に立てた。

(ロ) 同音の漢字による書きかえ。資料によって書きかえる熟語は、検索見出しをたてた。

(九) 参照項目

付録で解説してある事項については、も付録「中国の文字とことば」のよう

付録について (省く)

付録には、漢字・漢文・中国語・中国史・中国文化などの理解に役立つように左の六つの内容を収録した。

(一) 中国の文字とことば……漢字の成り立ち、漢字の字体の変遷、漢字の音、中国語の音韻体系の変遷、広韻・韻鏡・詩韻・中原音韻などの解説、日本の上代特殊かなづかい、呉音・漢音・唐宋音の由来などの解説。

(二) 中国の名著……詩経から紅樓夢にいたる、中国の思想・文学・歴史・地理・芸術・言語・文字などに關する重要な書物三三〇点の解説。

(三) 中国簡体字表……現在、中国で使われている簡体字、その繁体字(旧字体)、日本の当用漢字の比較一覧表。

(四) 中国の詩……詩型を中心にした「詩経」から現代詩までの解説。

(五) 中国文化史年表……文化史を中心をおいた、中国史の年表と解説。

(六) 中国歴史地図……中国の歴史および文化に關係ある四色刷りの地図。

《出典名一覧》

本書で引用した出典名のうち、略称を用いたものを左に示す。篇名も、適宜、簡略にして示した。

|        |           |      |           |
|--------|-----------|------|-----------|
| 易経(周易) | (易・乾)     | 戰国策  | (国策・秦一)   |
| 書経(尚書) | (書・堯典)    | 呂氏春秋 | (呂覽・為欲)   |
| 詩経(毛詩) | (詩・周南・關雎) | 孔子家語 | (家語・三恕)   |
| 春秋左氏伝  | (左伝・昭二〇)  | 世説新語 | (世説・言語)   |
| 春秋公羊伝  | (公羊・宣一三)  | 列女伝  | (列女・鄭孟桐母) |
| 春秋穀梁伝  | (穀梁・文一〇)  | 白虎通義 | (白虎通)     |
| 論語     | (論・学而)    | 風俗通義 | (風俗通)     |
| 孟子     | (孟・梁上)    | 經典釈文 | (釈文)      |
| 韓非子    | (韓非・顯学)   | 説文解字 | (説文)      |

後漢書

三国志

新唐書

舊唐書

資治通鑑

古事記

(後漢・光武)  
(魏志・武帝)  
(蜀志・劉禪)  
(呉志・孫堅)  
(旧唐・高祖)  
(新唐・太宗)  
(通鑑・漢高祖元)

《略語・記号一覧》

⑥⑦⑧⑨ 呉音・漢音・唐宋音・慣用音  
(平) 平声・上声・去声・入声

(動) 名詞  
(動) 動詞  
(形) 形容詞  
(副) 副詞  
(助動) 助動詞  
(接統) 接統詞  
(感) 感動詞  
(指) 指示詞  
(前) 前置詞  
(代) 代名詞  
(疑) 疑問詞  
(助) 助詞・接頭辭・接尾辭  
(單位) 單位詞  
(數) 數詞

親字の意味  
漢字の成り立ちの解説  
古訓資料  
異体字關係  
人名としての訓読み  
当用漢字の音訓とその例  
および、参考事項の解説  
親字が下につく熟語  
日本語特有の親字の意味  
同音同義の親字・熟語

日本書紀 (紀・神代)

日本外史 (頼山陽・外史)

新撰字鏡 (新)

倭名類聚抄 (和)

類聚名義抄

圖書家本 (図名)

観智院本 (観名)

反義の親字・熟語  
異音同義の親字・熟語  
偏が異なるので、同音  
同義の熟語  
補説、参考事項の解説  
俗語  
仏教語

日本語特有の熟語の意味  
当用漢字表にない漢字  
当用漢字補正資料で当用  
漢字表に加えられる漢字  
当用漢字  
六年の配当漢字に繰り下  
げられた当用漢字  
教育漢字  
人名用漢字  
当用漢字補正資料で当用  
漢字表に加えられる漢字

国字  
国字  
甲骨文字  
金石文字  
古文  
籀文  
篆文  
楷書

補人教当

國字

國字

## 四四

一  
二  
三  
六  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十  
二十一  
二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十  
三十一  
三十二  
三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十  
四十一  
四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十  
五十一  
五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十  
六十一  
六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十  
七十一  
七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十  
八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十  
九十一  
九十二  
九十三  
九十四  
九十五  
九十六  
九十七  
九十八  
九十九  
一百

一四〇  
一三九  
一三八  
一三七  
一三六  
一三五  
一三二  
一三一  
一三〇  
一二九  
一二八  
一二七  
一二六  
一二五  
一二四  
一二三  
一二二  
一二一  
一二〇  
一一九  
一一八  
一一七  
一一六  
一一五  
一一四  
一一三  
一一二  
一一一  
一一〇  
一〇九  
一〇八  
一〇七  
一〇六  
一〇五  
一〇四  
一〇三  
一〇二  
一〇一  
一〇〇  
九九  
九八  
九七  
九六  
九五  
九四  
九三  
九二  
九一  
九〇  
八九  
八八  
八七  
八六  
八五  
八四  
八三  
八二  
八一  
八〇  
七九  
七八  
七七  
七六  
七五  
七四  
七三  
七二  
七一  
七〇  
六九  
六八  
六七  
六六  
六五  
六四  
六三  
六二  
六一  
六〇  
五九  
五八  
五七  
五六  
五五  
五四  
五三  
五二  
五一  
五〇  
四九  
四八  
四七  
四六  
四五  
四四  
四三  
四二  
四一  
四〇  
三九  
三八  
三七  
三六  
三五  
三四  
三三  
三二  
三一  
三〇  
二九  
二八  
二七  
二六  
二五  
二四  
二三  
二二  
二一  
二〇  
一九  
一八  
一七  
一六  
一五  
一四  
一三  
一二  
一一  
一〇  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
〇

二六六  
二九一  
二九四  
二九五  
三〇六  
三〇八  
三〇九  
三二九  
三三八  
三六六  
三七四  
三七七  
三八〇  
三八  
三八  
三九  
三九  
四〇  
四〇

心(忄) 戈 戶 手(扌) 支(攴) 支(攴) 文 斗 斤 方 无(无) 日 日 月 木 欠 止 歹(殳)

四五五 五〇〇 五〇六 五〇九 五六二 五四四 五七六 五七八 五八二 五八七 五八七 六二一 六一五 六三三 六七八 六八四 六八九

六九六  
六九七  
六九八  
六九九  
七〇一  
七〇二  
七〇三  
七〇四  
七〇五  
七〇六  
七〇七  
七〇八  
七〇九  
七一〇

0811  
0816  
0818  
0819  
0820  
0826  
0827  
0829  
0830  
0836  
0837  
0839  
0840  
0841  
0842  
0843  
0844  
0845  
0846  
0847  
0848  
0849  
0850  
0851  
0852  
0853  
0854  
0855  
0856  
0857  
0858  
0859  
0860  
0861  
0862  
0863  
0864  
0865  
0866  
0867  
0868  
0869  
0870  
0871  
0872  
0873  
0874  
0875  
0876  
0877  
0878  
0879  
0880  
0881  
0882  
0883  
0884  
0885  
0886  
0887  
0888  
0889  
0890  
0891  
0892  
0893  
0894  
0895  
0896  
0897  
0898  
0899  
0900

07/04

|        |      |      |      |      |      |      |        |        |      |      |     |     |      |      |      |      |      |        |     |
|--------|------|------|------|------|------|------|--------|--------|------|------|-----|-----|------|------|------|------|------|--------|-----|
| 缶      | 糸    | 米    | 竹    | 六圖   |      | 𦃟(衣) | 𦃟(網·元) | 水(水·彡) | 立    | 穴    | 禾   | 肉   | 示(示) | 石    | 矢    | 矛    | 目(目) | 皿      | 皮   |
| 二〇三    | 九二   | 九五   | 九六   | 二一五  | 二一五  | 二一五  | 二一五    | 二一五    | 二一五  | 二一五  | 二一五 | 二一五 | 二一五  | 二一五  | 二一五  | 二一五  | 二一五  | 二一五    | 二一五 |
| 艸(艸·艸) | 色    | 艮    | 舟    | 舛(舛) | 舌    | 白(白) | 至      | 自      | 臣    | 肉(月) | 聿   | 耳   | 耒    | 而    | 老(老) | 羽    | 羊(羊) | 网(网·元) |     |
| 二〇六    | 二〇七  | 二〇六  | 二〇三  | 二〇三  | 二〇二  | 二〇九  | 二〇九    | 二〇四    | 二〇三  | 二〇五  | 二〇八 | 二〇三 | 二〇二  | 二〇一  | 二〇六  | 二〇三  | 二〇六  | 二〇三    |     |
| 足(足)   | 走    | 赤    | 貝    | 豸    | 豕    | 豆    | 谷      | 言      | 角    | 見    | 七圖  |     | 瓜(瓜) | 西(西) | 衣(衣) | 行    | 血    | 虫      | 虎   |
| 二二五    | 二二九  | 二二七  | 二二五  | 二二八  | 二二六  | 二二四  | 二二四    | 二〇三    | 二一九  | 二二四  | 二〇六 | 二〇六 | 二〇五  | 二〇五  | 二二六  | 二二六  | 二二六  | 二二六    | 二二六 |
| 隶      | 阜(阜) | 門    | 長    | 金    | 八圖   |      | 麦(麥)   | 舛(舛)   | 白(白) | 臣    | 里   | 采   | 酉    | 邑(邑) | 走(走) | 辰    | 辛    | 車      | 身   |
| 二二五    | 二二二  | 二二八  | 二二五  | 二二四  | 二二七  | 二〇三  | 二〇九    | 二〇九    | 二〇三  | 二〇六  | 二二九 | 二二五 | 二二五  | 二二四  | 二〇六  | 二〇五  | 二〇三  | 二二七    | 二二六 |
| 十圖     | 香    | 首    | 食(食) | 飛    | 風    | 頁    | 音      | 非      | 韋    | 革    | 面   | 九圖  |      | 齊(齊) | 食(食) | 非    | 青(青) | 雨      | 佳   |
| 二四七    | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六    | 二四六    | 二四六  | 二四六  | 二四六 | 二四六 | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六  | 二四六    | 二四六 |
| 黃(黃)   | 黑(黑) | 黃(黃) | 麻(麻) | 麥(麥) | 鹿    | 鹵    | 鳥      | 魚      | 十一圖  |      | 鬼   | 鬲   | 鬯    | 門    | 髟    | 高    | 骨    | 馬      |     |
| 二五九    | 二五九  | 二五九  | 二五八  | 二五七  | 二五五  | 二五四  | 二五三    | 二五三    | 二五三  | 二五三  | 二五三 | 二五三 | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三    | 二五三 |
| 龠      | 龜    | 龍    | 十六圖  |      | 齒(齒) | 齊(齊) | 鼻      | 十四圖    |      | 鼠    | 鼓   | 鼎   | 睪    | 十三圖  |      | 齒(齒) | 黼    | 黑(黑)   | 黍   |
| 二五三    | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三    | 二五三    | 二五三  | 二五三  | 二五三 | 二五三 | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三  | 二五三    | 二五三 |



うちに、朝は再びこない。時は過ぎやすす、若いときほど再びこないことのたとえ。『蘭語雑考』及『歳月不待人』(『大分県史』一頁)。

一日(イッパツ) 全体のうちのわずかな一部分。『三才圖會』。

その人一身の面目。







